

全校朝礼講話（11月17日）

我が国初の女性総理大臣の高市早苗さんが、自民党総裁就任時に語った言葉が物議を醸していますね。皆さん知っていますか。

「全員に馬車馬のように働いてもらう。私自身もワーク・ライフ・バランスという言葉捨てて。働いて、働いて、働いて参ります」

このように言われたのですね。自民党総裁になったからには自身の生活を犠牲にしても日本のために頑張りたいという意気込みを表現したかったのだろうと私は好意的に受け止め、私自身はこの発言に対しネガティブな感情は湧きませんでした。また、その後の首班指名選挙で指名されて総理大臣になれば、プライベートな時間を持つことなどはじめから無理でしょう。しかし、今や「過労死」という言葉が外国語でも認識されるようになり、働き方改革が叫ばれている時代においては、少々不注意な発言だったかもしれません。親族や大事な友人に、異常な時間外労働を理由に自ら命を絶った人がいるような方にとってはなおさら許せない発言だったかもしれません。

まあ、とりあえず今日は高市首相の発言の是非を論じることはしません。時間があるときに皆さんで議論してみてください。では、なぜ今日この話を出したのか。それは、高市さんのこの発言を聞いて、次の言葉を久しぶりに思い出したからです。

「24時間戦えますか」

これは、私が大学生の頃、リゲインという栄養ドリンクがあったのですが（今もありますかね？）、そのリゲインのCMのキャッチコピーだったので、CMソングも流行りました。私は今でも歌えます。

1980年代から90年代にかけて、日本は経済で世界を席卷し、世界第2位の経済大国に駆け上がりました。私は大学生の頃で、まだバブルもはじける前で、アメリカに次いで世界のとっぺんをとったかのような高揚感が日本中に溢れていたような時代です。先ほどのCMソングも元気がありますよね。そんな時代ですから、大学の友人たちはこぞって民間企業に就職していきましました。「企業戦士」という言葉が流行ったのもこの頃です。「戦士」ですから、24時間「働けますか」ではなく、「戦えますか」なわけです。そして24時間戦った末に、がっぽりと給料を手にすることができる。ですから、当時都会の大学生で、民間より給料が安い公務員や公立学校の教員などになろうとする人はあまりいませんでした。私も初めのうちは何となく民間企業に就職して24時間戦うのかな、などとぼんやり考えていました。

しかし同時に、私の中にはこのリゲインのキャッチコピー「24時間戦えますか」にツッコミを入れる自分もいたのです。

「いつ寝りゃいいんだよ」

どんなに高い給料が貰えたとしても、私にとって大好きな睡眠の時間を削られることは耐えがたいことだったのです。給料は高くなくても、自分のための時間も充実させながら、大好きな英語を生徒に教えることでお給料をいただき、自分らしく生きた方がいい。それくらいでいいのではないか。そう考えて、今の道に進んだのです。

でも、よく考えてみると、これこそが「ワーク・ライフ・バランス」を考えた生き方なのではないか、そう思うわけです。当時、「ワーク・ライフ・バランス」などという言葉もない時代に、周りの友人や時代の空気に流されることなく、私は勝手に「ワーク・ライフ・バランス」を無意識にとろうとしていたのだと思います。確かに、給料の面では歴然とした違いがありました。就職した1年目の年末に、広告代理店に就職した高校時代の友人と東京で再会した時、冬のボーナスの話題になって比べてみたら、なんと彼は私の額の3倍以上はもらっていました。しかし、これを知って「すごい額だなあ」とは思っても、うらやんだり妬んだりという感情は私には湧きませんでした。24時間企業戦士として戦うことを否定はできませんでしたが、自分がそのような働き方をすることがどうしても想像できなかったのです。

かねてから感じるのですが、日本では電車が時刻表通りに運行されるなど、日本人が時間に几帳面だというイメージが世界的に広まっていますが、私は「効率」とか「生産性」という観点から考えると、必ずしも日本人が時間に対して丁寧に接していると思えないことが結構あるのです。

私の子ども時代の学校の先生の中にも、やたら時間に厳しい先生がいて、何事にも私たちに5分前行動を求めていました。でも、授業5分前にはみんな着席させて授業の準備を万端にさせるくせに、しょっちゅう5分くらいは軽く授業をオーバーするのです。5分前から生徒を拘束し、5分オーバーするその60分の授業内容を50分で完結させるのがプロフェッショナルなのではないか。同じ内容なら60分よりも50分の方が濃度は濃いはず。私はそんなことを考える学生でしたので、教員になった後、私は特に授業の終了時間だけはオーバーしないように注意していました。

これが間違いではないことを、外資系の企業で働く人の対談記事を読んだときに確信しました。この記事には、とかく日本企業は会議の時間が無駄に

長い、始業時間は厳守させるのに終業時間はルーズという話が出ていました。外資系では「時間は借り物」という概念があって、例えば1時間の予定の会議が45分で終わったとすると、“Fifteen minutes back to you.”と言って会議を解散するそうです。つまり、「1時間借りていたけど45分で終わったから、15分返すね」ということです。この「返す」という表現が、時間に対する考え方を端的に示していると思うのです。余った15分はきちんと返す。そして使わせてもらった45分は、参加した人にとって意義のある時間としての「価値」で返すという考え方なのだと思います。だから、借りた時間に行く会議の価値を高めるために、出会者は意識を研ぎ澄まし、意見を戦わせる。時間内に終わればそこで終了する。一方、日本の場合は、会議の時間が1時間ということになると、「時間は借り物」という意識がないので、与えられたその時間を使い切ること何ら罪悪感がない。なので、無責任に意見を言い合い、あるいは何も発言しなかったりして、結果、時間がオーバーしても誰も文句を言わない。このような会議の「価値」が高いと言えるでしょうか。

どうも我々日本人は、終わりの時間をキチンと設定して、その時間あたりの「価値」を高める工夫をするというのが苦手なようです。先程の外資系で働く人の話の通り、やたら効率が悪く仕事に終わりが見えない。だから、大人も働き方改革が進まない。中身の薄い時間が延々と長くなってしまう。この行き着く先が、「24時間戦えますか」なのではないかと思います。もし地球の自転する速度が半分に落ちて、一日が48時間になったとしても、何の躊躇もなく「48時間戦えますか」と言ってしまうのでしょうか。

そんなの絶対に無理でしょう。現在、日本の経済が停滞している一因はここにあると私は思っております。「どうせこの程度の成果しか出ないなら、思い切って時間を短縮して、新たに生じた時間で何か別のことにチャレンジする」というような思い切った考え方をした方がよっぽどクリエイティブなのに、そういう発想ができない。ですから、「働き方」を改革する「手段」をあれこれ考えるよりも、「働く時間」に対する「意識」を改革することの方が先だと私は思うのです。

リゲインが販売された頃、「24時間戦えますか」ではなく、

「決められた勤務時間で輝けますか」

みたいなキャッチコピーだったらその後の日本の姿も変わっていたかもしれません。「結果は勤務時間内で出す」。このほうが格好いいじゃないですか。

これと同じことが、これから大学入学共通テストに向かう３年生にも言えると思います。１月１７日・１８日という期日まで、ただ闇雲に学習するのではなく、試験時間内で最高のパフォーマンスを発揮できるように、残された時間で何をどのように学習していくのか。これを考えて実行するのが皆さんの腕の見せ所なのです。自分が今手にしている限られた「時間の価値」を高められるよう脳に汗をかいて頑張してほしいと思います。その際に、何かアドバイスが欲しかったり話したいことがある人は、いつでも私を含め本校の先生方誰にでも相談に来てください。